

こいぶみの前身「ひろしまる倶楽部」の表紙を飾ってくださったみなさんを、10年経過した今、再び訪れて「今」を話していただきました。

# 惜しみない愛情を注ぎ 「古江いちじく」ブランドを 守り続ける

西区田方 鳥越博己さん

西区の古江・田方・高須地区で100年以上栽培され、地元をはじめ多くの方に愛されている「古江いちじく」。鳥越博己さんは、その地で代々続くイチジク農家です。定年退職を機に本格的に就農し、ご両親から受け継いだ10aの圃場で、約40本のイチジクを栽培し、先祖代々の味を守り続けています。

「ただなっとるのをもぐだけじゃない。愛情かけて育て

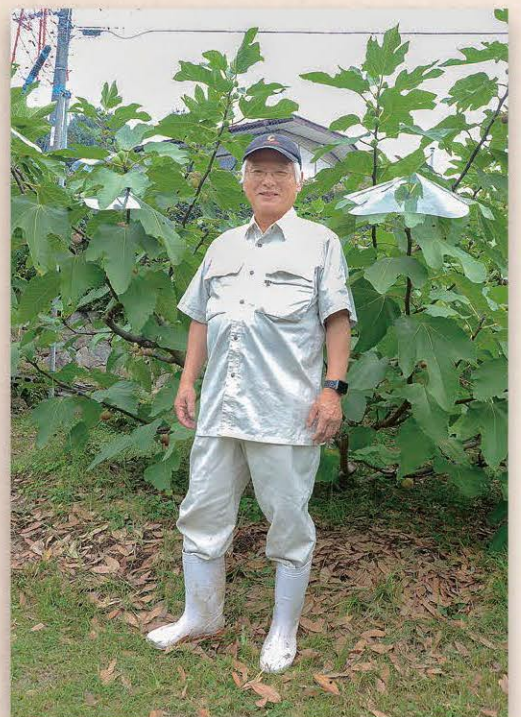
んと、いいものはできん」と話す鳥越さん。昨年からは、収量や品質の向上を図るため、JAの小田祐司営農指導員の提案で、収穫時期の降雨からイチジクの実を守る雨よけ笠を導入しました。また、指導員と協力して、市場への共同出荷量の安定確保を近隣の生産者に呼びかけるなど、他の生産者やJAと一体となって「古江いちじく」のブランド力の向上に取り組んでいます。

また、地元公民館主体の地域の特産「古江いちじく」を次世代に継承する活動『古江いちじくプロジェクト』にも協力。「地元の子もたちに、自分たちが暮らす地域に伝わる特産の「古江いちじく」を知ってもらいたい」と、小学生の圃場見学を毎年受け入れ

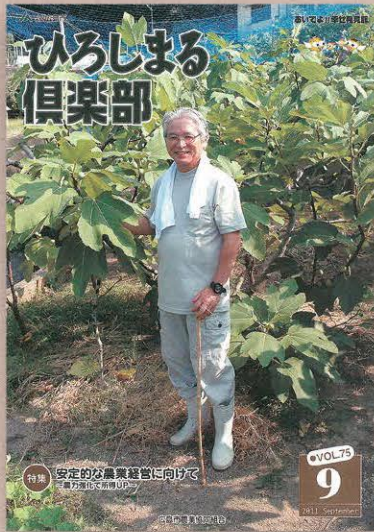
たり、今年からは小学校への出前授業も受け持ち、地域への貢献活動にも熱心に励まれています。

朝もぎのイチジクの収穫は、とにかく早起き。午前2〜3時から作業を開始し、5時半には、共同出荷場所へ持ち込みます。以前と比べると、体力が落ちてきていると話しますが、自らを「道具マニア」と呼ぶほどの鳥越さんは、自分でいろいろな道具を作成し、体力が落ちた分を工夫で補っています。

「年齢を考えるとあと10年くらいかな」と言いながらも、「死ぬまでがんばる」とまだまだやる気は十分。「人が口にするものだから、とにかく気をつ



2021



2011

▼小田指導員の提案で導入した雨よけ笠。収穫間近のイチジクを降雨から守ります。



けて、愛情をかけて育てるのが信条」という鳥越さんの思いは、地域の宝「古江いちじく」とともに、今後も地元に通じていけます。



▲古江支店購買店舗でも販売。生産者が持ち込む朝もぎのイチジクを楽しみに、行列もできるほど。